学生のアイデンティティとTATの関連

――ステイタス分類とTAT反応から――

柴　田　康　順

問題と目的　青年期は一旦大人に従属する子どもとしての在り方を放棄しつつも、未だ社会の担い手としての大人の在り方を獲得していないという点で、社会構造に属さない不安定な境界期であるとされる。青年は、不安定な境界性の中で子どもから大人への構造転換という困難な発達課題に取り組まねばならず、心理的混乱が生じやすい時期であるとされている（下山, 1998）。多くの大学生が位置する青年期後期は発達上、「青年から成人への移行期（Levinson, 1978）」であり、アイデンティティ（Ego Identity／自我同一性）の確立（Erikson, 1959）などの重要な課題に直面する時期である。アイデンティティに関する研究はこれまでに数多くなされてきたが、アイデンティティを達成する際の否定的な側面に着目したのがMarcia（1966）の研究である。Marciaはアイデンティティの達成という課題への対処の仕方を危機（crisis）と傾倒（commitment）という2基準から分類しようとした。そして、その経験の有無によってアイデンティティの問題への対処の仕方を4つに類型化したのがアイデンティティ・ステイタス（Identity Status／同一性地位）であり、アイデンティティの状態を把握する指標として有用である。

ところで、アイデンティティが他者との関係の中で形成されることに注目して、近年ではアイデンティティを関係性の次元から捉えなおす試みがなされている。杉村（1998）は自己と他者との関係の在り方がアイデンティティであるというパラダイムを持つ必要性を述べ、アイデンティティ形成を「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスである」としている。さらに、発達早期の自我形成がのちのアイデンティティに及ぼす影響が注目され、対象関係という文脈からアイデンティティを捉え直そうとする試みも増加している（岡本, 2002）。早期の対象関係について示唆を得るためには投影法による検討が必要であると考えられ、無意識の対象関係を推測するためにTAT（Thematic Apperception Test／主題統覚検査）の導入が有効であると考えられる。

以上から本研究では、学生のアイデンティティの状態によって、TAT反応にはどのようなイメージが表出されるのかという点について考察する。具体的には、①アイデンティティ・ステイタスとTAT反応の関連を探り、その特徴を見出し、②アイデンティティの確立に関係する要因が、どのようなTAT反応として表出されるのかを探ることを目的とする。

方法　大学生と大学院生13名に対し、質問紙調査（同一性地位判別尺度：加藤, 1983）とTATを実施した。同一性地位判別尺度によって分類されるステイタスは、1）同一性達成地位（Achievement）、2）権威受容地位（Foreclosure）、3）積極的モラトリアム地位（Moratorium）、4）同一性拡散地位（Diffusion）という4つの典型地位と、5）同一性達成―権威受容中間地位（A-F中間地位）、6）同一性拡散―積極的モラトリアム中間地位（D-M中間地位）の6つである。この尺度によって、本研究協力者は、同一性達成地位3名、積極的モラトリアム地位1名、D-M中間地位9名に分類された。

結果と考察　質問紙によって分類された同一性達成地位3名とD-M中間地位9名を分析の対象とした結果、以下の特徴が見いだされた。同一性達成地位におけるTAT反応の特徴は①両親との距離感、②表面的で衝突を避ける対人関係の2つであった。大矢（1999）は同一性達成地位のTAT反応の特徴について、親との関係は穏やかな肯定的感情を基調とする安定したものであり、第二の個体化（Blos, 1967）が達成された後の親イメージの特徴を示すとしている。しかし、本研究で得られた知見はこれと異なり、親への依存からの離脱は果たされているものの、それは恒常性を持った内的対象として内在化された親から自立したものではないと考えられる。ただし、同一性地位に分類された4名はすべて大学4年生であることから、意識的な回答が可能であるという質問紙調査によるステイタ

ス分類の問題点は看過できない。

一方、D-M 中間地位における TAT 反応の特徴は以下の 2 点である。①子どもに対して保護的な母親イメージを持つ場合、健全な異性関係イメージを持つ。超自我的な父親イメージを持つとき、母親との対決が見られ、親からの自立の意思が明確に感じられる一方、無力な父親イメージを持つときは、母子未分離で自立の意思は感じられない。②子どもに対して拒否的な母親イメージを持つ場合、父親は不在であり、異性関係イメージも阻害されている。大矢は積極的モラトリアム地位では親イメージに超自我が投影されて葛藤を体験し、同一性拡散地位では分裂した対象像が投影される傾向があるとしているが、この点を踏まえると、D-M 中間地位において超自我的な父親イメージを持つ場合は積極的モラトリアム地位に近く、父親が不在で拒否的な母親イメージを持つ場合は同一性拡散地位に近い可能性があるが、尺度得点上では明確な差はなかった。

以上から、主に D-M 中間地位の特徴を基にした知見となるが、アイデンティティの確立は保護的な母親イメージと安全基地としての家イメージを前提としたうえで、母親イメージとの対決と超自我的な父親イメージが見られ、結果的に親から自立するというテーマとして TAT 反応に表出される可能性が示唆された。しかし、本研究はサンプル数の少なさと質問紙によるステイタス分類という問題点があるため、学生のアイデンティティと TAT 反応の関連について十分に考察できたとは考えにくい。今後はより多くのデータ収集を行い、縦断的な研究を行うことで、より細分化されたアイデンティティの状態を識別することが可能となるような知見を得ることが必要であると思われる。

（大学院人間学研究科博士後期課程福祉・臨床心理学専攻）